

羅什訳妙法華經の二三の問題

望 月 海 淑

このことに関しては先に指摘したところでもある⁽¹⁾。これはそれらの要点を一つにまとめ、整理をしようという主旨のものであるから、よって、その3点の論文もあわせて御覧になることを希求するものである。尚、引用の法華經は『大正新修大藏經第九卷』であり、梵文法華經は『Saddharmapuṇḍarīka - sūtram』 by U.Wogihara and C.Tsuchida 本であり、次の数字は、その頁数である。

1 antarīkṣa・vaihāyasa・虚空

先ず虚空の問題を取り上げなければならない。梵文法華經において虚空と訳されているところを見ると、それはほとんどの場合 antarīkṣa と vaihāyasa と ākāśa の3語であるが、この中で vaihāyasa の語は antarīkṣa と一緒に使用されることも多く、一緒になっても、単独で使用されていても、それは空（そら）という意味で使用されており、ākāśa はいわゆる無限な広がり、哲学用語での虚空を意味するものとして使用されているように思われる。

すなわち、それはどう違うのかについて検証してみようと思うところである。たとえば、

諸天龍鬼神 供養人中尊。(4下)

諸天鬼神 住於虚空 一心奉敬 人中之尊。(66下)

devās ca yakṣās ca sthitā antarīkṣe kurvanti pūjāṃ dvi - pada

羅什訳妙法華經の二三の問題（望月海淑）

uttamasya (21) (空中に留まる神々も夜叉等もが、兩足尊に最上の供養をなす。)と序品には示されている。これは曾って大乘經が説かれた時に、諸天や竜神たちが佛を供養したという説示のところであるが、梵文法華經が antarikṣa (空中)としているのに対して正法華經は虚空と訳しており、妙法華經には訳語がない。

しかし譬喩品では

所散天衣住~~虚空~~中~~。~~而自廻轉。諸天伎樂百千萬種。於~~虚空~~中~~。~~一時俱作。
(12上)

以天華香意華大意華散于佛上。諸天衣物悉在虚空羅列而住。天上伎樂自然而鳴。(75上)

bhagavantam divyair vastrair abhicchādayāmāsuḥ | divyaiś ca māndāravair mahā - māndāravaiś ca puṣpair abhyavakiranti sma | divyāni ca vastrāṇy upary antarikṣe bhrāmayanti sma | divyāni ca tūrya - śata - sahasrāni dundubhayaś ca upary antarikṣe parāhananti sma | (67) (世尊に天上の衣服を差し上げた。天上の曼陀羅華・大曼陀羅華を撒き散らした。天上の衣服を空中に翻させた。天上の百千の樂器や太鼓を空中に打ち鳴らした。)

と示して、antarikṣa の語が二度にわたって示され、妙法華經はこれを二度にわたって虚空と訳し、正法華經は一度だけだが虚空の訳語を使用している。

すなわち、antarikṣa を妙・正兩法華經ともに虚空と訳しているか、序品の場合のように場所として明白なので省略したものかと思われるものかであるが、この詳細については前述のように、拙論「法華經における虚空について」「法華經における虚空の理解」において述べたところでもあるから、以下は省略する。尚、antarikṣa は空中を意味する言葉であるから、これを虚空と訳するのにはいささかな異議を覩ずるところでもある。このことについては、ākāśa のところにおいて述べるつもりである。

尚、上述の序品の引文のように妙法華經が antarikṣa を虚空と訳さないところは、序品で一カ所・信解品で一カ所・化城喩品で一カ所・見寶塔品で二カ所・如来神力品で一カ所・藥王菩薩本事品で一カ所である。又、antarikṣa をともなわないで、ただ vaihāyasa だけの語の時も虚空という訳語を使用している。それは

飛行自在。(27下)

飛行虚空。(96上)

vaihāyasam - gamā (178) (空中に行く。)

という化城喩品の場面であり、更に、見寶塔品では多寶如来の証明がなされたことに関する一連の説示の中に、「從_レ地踊出。」(32下)は「parṣan - maṇḍalasya upari vaihāyasam tiṣṭhet (209) (集まった会衆の上の空中に留まり)」とあり、衆生等が如来の神力によって我々も空中に登らせて欲しいというところで、「令_レ我等輩俱_レ處_レ虚空。」(33下)「令我等輩俱處虚空。」(104上)「vayam api tathāgata anubhāvena vaihāyasam abhyudgacchema iti (215) (我々も如来の神力によって空中に登りたい。)」と説示されている。而して何故か、後分法華經といわれる部分では、この vaihāyasa の語が単独で使用されている場面が多い。それは藥王菩薩本事品で一度・妙音菩薩品で一度・妙莊嚴王本事品で二度であるが、今は詳細な説示は省略する。

2 ākāśa・虚空

antarikṣa と梵文法華經によって示された場面を見てきたのであるが、次には ākāśa の語が示されている場面を見ようと思うのだが、先ず最初は譬喩品であるが、そこでは三車火宅の喩を語る段で、子供たちが長者のいうことを聞いて火宅から出たのを見て長者は、

皆於_レ四衢道中露地_レ而坐。(12下)

四面露坐心各踊躍。(75中)

ākāṣe grāma - catvara upaviṣṭaḥ (71)（虚空の四辻に坐して。）

と示されており、そこは虚空・ākāśa の中においてであることを示している。これは喩え話であるから、昔語りにあるような「昔昔あるところに」というようなもので、青空のように目にする事の出来るものではなく、目に見える現実を超えたものを意味するためであろうと思われる。その意味では妙法華經が訳した四衢道中露地、正法華經が訳した四面露坐では、現実過ぎて具合が悪いであろう。⁽²⁾又、この品の偈の中では、子供らが三車を求めて自分の足で歩いて、苦難から免がれたことを、

到於空地 離諸苦難。(14中)

得脱苦惱 集子一処 安隱欲然 無復恐懼。(77中)

nirdhāvītās tat - kṣaṇam eva sarve ākāśi tiṣṭhanti dukhena muktāḥ

(82)（すべてが走り出た瞬間に、苦難から解放されて虚空にとどまった。）

と示されている。妙法華經は ākāśa を空地と訳しており、正法華經は意識であるが、それは何ものにも妨げられず、自由自在な場面を意味するからであろう。

このような使用の場面は、五百弟子授記品の中での富樓那が授記され法明如来となるであろうといい、その国では「諸天宮殿近処虚空」(27下)「猶如諸天空殿麗妙遙相瞻見」(95下) deva - vimānāni c' ākāśa - sthitāni bhaviṣyanti (178)（天（神々）の宮殿は虚空にとどまり）においても同じようなありようで、神々がおられるところは現実の場面ではないからであろう。

このようなありように対して、藥草喩品においては別の意味の使用例の説示がある。それは

所謂解脱相離相滅相。究竟涅槃常寂滅相。終歸於空。(19下)

世尊如之見一味已。入解脱味志于滅度。度諸未度究竟滅度。(83下)

nirvāṇa - paryavasānaṃ nitya - parinirvṛtaṃ eka - bhūmikam ākāśa -
gatikam adhimukutaṃ … (116)（究竟の涅槃、常の滅度を唯一の立場として、

虚空に行くものと信解し。）

というのがそれであるが、ここでは妙法華經が ākāśa を空と訳していることは明白であり、正法華經は解脱・滅度などの言葉を利用して究竟滅度と訳していることになる。虚空・ākāśa が佛教の基本理念である空と訳されたのは何故なのか、これはどうしたことなのだろうか。その手がかりを序品の説示に見ることにする。そこでは、

或見_レ菩薩 觀_レ諸法性 無_レ有_二相_一 猶如_レ虚空_也 又見_レ佛子 心無_二所著_一 以_二此妙慧_一 求_レ無上道_也。(3中)

或有得人 寂然法誼 察諸報應 衆億兆載 發起民庶 使其悔過 令捨億宝 志願佛道 曉了觀察 不秘悋法 滅除三事 寂等如空。(65上・中)

dharmam ca ke - cit pravadanti śāntam dṛṣṭānta - hetu - nayutair anekaiḥ | deśenti te prāṇa - sahasra - koṭinām jñānena te prasthita agra - bodhim || nirihakān dharmā - prajānamānā dvayaṃ pravṛttān khaga - tulya - sādṛśān | (12) (あるものは那由他以上の因縁において寂滅の法を語り、千万億の人々に智によって最高の覚を説く。空を行く鳥のように両者にかたよらず nirihakā の法を知って。)

と示されている。ここで妙法華經が虚空と訳した語は、nirihakā であることは明白であり、この言葉は「しばしば空 sūnya と組み合わせて使われる⁽³⁾」というから、それは青空というような単なる広がりや空間のことではなくて、佛教の基本理念に関わるようなもの、一切皆空のような物質・境界を越える理念の世界のことだと思われる。すなわち、寂滅法と訳し正法華經が寂然法誼と訳したものは、dharmam śāntam であることは明白で、妙法華經が諸法性との訳で、正法華經が寂等如空と訳したものは、この nirihakā dharmā にあたるものと思われる。かかる意味合いにおいて、妙法華經が虚空と訳出したその虚空には、単なる虚空・広がりではなくて、それを超える何かが考えられるのである。

同じようなありようを菓草噉品に見ることが出来る。これは先述したところであるが、正法華經の訳文は煩雜なものであるが、究竟の滅度とは輪廻転生を断ち切ることであり、それ故に唯一の滅度であり、それは覚への道でもあろうから、ākāśa・虚空へ行くというのは、単なる広がりではなく、佛教の基本理念である空に入るの意味であろう。それ故にここでの見方は序品にある先述の言葉、nirihakāの立場と近いものと思われるのである。

そこで安樂行品を見ると、四安樂行の中の親近処を説くところであるが、それは長行と偈の中で示されているのであるが、そこには菩薩摩訶薩は

観一切法空。如実相。不顛倒。不動不退不転。如虚空。無所有性。…
 観一切法 皆無所有。猶如虚空。無有堅固。不生不出。不動不退。常住一相。(37中・下)

観一切法皆為空無。如所住立已墮顛倒。所立正諦常住如法。專乘身心不動不揺。不退不転 … 普観諸法 是一切法 猶如虚空 譬若虚無 等無堅固 不念取勝 無所棄捐 諸法所処 無有常名 是為明者。(107下・108中)
 であると説示し、両經典の内容は同一であるということが出来る。梵文法華經は、

sarva - dharmān śūnyān vyavalokayati yathāvat pratiṣṭhitān
 dharmān - aviparita - sthāyino yathā - bhūta - sthitān acalān
 akampyān avivartyān aparivartān sadā - yathā - bhūta - sthitān
 ākāśa - svabhāvān nirukti - vyavahāra - vivarjitān … eka agra - citto
 hi samāhitaḥ sadā Sumeru - kūṭo yatha susthitaś ca | evaṃ sthitaś ca
 api hi tān nirikṣed ākāśa - bhūtān imi sarva - dharmān || sadā pi
 ākāśa - samān asārakān aniñjitām manyana - varjitāṃś ca | sthitā hi
 dharmā imi nitya - kālaṃ || (237・240) (一切法を空と観察する。存在するま
 まに法はあり、不顛倒であり、あるがままに存在し、不動で、動かされず、不退で、
 変化せず、常にあるがままに存在し、虚空の自性のようにあり、言葉の表現を離れ…

羅什訳妙法華經の二三の問題（望月海淑）

心を一点にして三昧に入り、常に須弥山のように良くとどまり、このような状態で一切の法を虚空があるように観察すべきである。常に虚空と同じく頑固でなく、動揺せず、妄想を離れ、常の時に法は存在する。）

と示している。これによって見ると、虚空・ākāśa にたいする法華經の理解の仕方が明白であるように思われる。すなわち、一切法は空であると見なければいけない、空であるから頑な（堅固）であってはならず、しかも不動・不退・不転でなければならず、あるがままに存在するものであることを認めておくべきであり、それは虚空の自性のように、一つのものごとに執着してはならない（無所有性）、という時に、虚空というのは一切皆空という佛教思想の根底に繋がるものであることを示すものであろう。したがって虚空・ākāśa は青空・antarikśa とは異なり、可視的な空間ではなく、心の中のもの・思想的な広がりという意味するものでなければならないと思われる。

3 地涌の菩薩に関して

從地涌出品は如来の滅後の世において、他方の国土より来たれる菩薩を始めとする人々が法華經を説きましょうというのにたいして、釈尊は「止善男子」といい、これを拒否されて、その理由を示している。それはこの娑婆世界には六万恒河沙の菩薩・摩訶薩がおり、釈尊の滅後に法華經を説くことになっているからだと言われているからである。このように釈尊が述べられた時に、娑婆世界は震動して、その割れ目から無量の菩薩・摩訶薩が同時に涌出したことを説示しているが、その菩薩たちの住所について、次のように示している。

先尽在_レ此娑婆世界之下。此界虚空中_レ住。(40上)

在於地下_レ撰護土界。人民道行_レ倚斯忍界。(110中)

ye 'syāṃ mahā - pṛthivyām adha ākāśa - dhātau viharanti sma imām eva Sahāṃ loka - dhātuṃ nisṛitya (253) (この娑婆世界に属する大地の下の虚空世界に住んでいた。)

として、この沢山な菩薩たちは娑婆世界の下に住んでいたというのであるが、ここで注意をしなければならない点は、ākāśa dhātu を妙法華經は虚空と訳しているのであるが、正法華經は摂護土界と訳していることである。すなわち妙法華經においては従来の訳と違いはないのであるが、正法華經の訳語は極端に違っているということである。摂護土界というのは佛によって摂護されているという意味であろうが、何故にこのような極端に違う訳語を用いたのか、そこには大きな内容が隠されていなければならない。

このような際立った訳語はこの後の、地涌菩薩たちが vaihāyasam antarikṣa・空中に上って、釈尊と多宝如来に面奉したときのさまについて、

見₃諸菩薩遍₂満無量百千萬億国土虚空₁。(40上)

得普見。又使念知此忍世界。諸菩薩衆於虚空中。各各摂護百千佛土(110下)

imāṃ ca Sahāṃ loka - dhātum śata - sahasr'ākāśa - parigrhitāṃ bodhisattva - paripūrṇām adrākṣuḥ (256) (この娑婆世界が百千の虚空によって摂護され、菩薩が満ち溢れているのが見えた。)

と示されている。正法華經は先には摂護土界と訳し、ここでは虚空の中で各各百千の佛土に摂護されている、と訳出していることは明白である。parigrhīta・摂護・護持するの語があるために、摂護百千佛土と訳したものと思われるが、要はこの人たちの住所は諸佛によって摂護される場所・世界を意味するであろう。

更に、従地涌出品は続けて、上行・無辺行等の四菩薩をリーダーとする無量の従地の菩薩たちが釈尊と対話をした、これを見た弥勒菩薩は疑念を晴らすために釈尊に質問をした。その時に他方の国土から来た釈尊の分身の諸佛たちも宝樹の下に坐った。そして諸佛の侍者たちは、

各各見₇是菩薩大衆。於₃三千大千世界四方₁從₂地涌出住₄於虚空_上。(41上)

各各見諸菩薩無量大会部部变化。従地涌出。(111下)

bodhisattva - gaṇaṃ bodhisattva -rāṣiṃ dr̥ṣṭvā samantāt pṛthivi -
vivarebhya unmajjantam ākāśa - dhātu - pratiṣṭhitam (260) (菩薩の集
団・沢山な菩薩らがあまねく大地の割れ目から涌き出し、虚空世界にとどまるのを
見た。)

と、地涌の菩薩等が大地の下の虚空世界・ākāśa - dhātu から涌出したことを
示している。これを見て、この人達は何処から来たのか、このようなことは未
だ見たこともないと釈尊に質問をする。釈尊はこの質問を受けて、覺りを開き
佛陀となった釈尊が、私が教化したものであり、未来のために調伏してきたも
のだと示すが、そのことについて

於_二是娑婆世界之下此界虚空中_一住。(41中)

处于下方而於其中。(112上)

として、娑婆世界の下の虚空の中に住していた、とだけ妙・正法華經は示すに
とどまっているが、梵文法華經は

bodhisattvā mahāsattvā asyāṃ Sahāyāṃ loka - dhātāv adhasād
ākāśa - dhātu - parigrahe prativasanti (262) (菩薩・摩訶薩たちはこの娑
婆世界の下の方の佛の摂護の虚空世界に住んでいた。)

と示して、虚空世界は佛に摂護される世界であることを説示している。これに
ついては引き続き示される偈の中においても、

在_二娑婆世界 下方空中_一住。(41中)

在于下方 今日故来 摂護国土。(112中)

vasanti ākāśa - parigrahe 'smin kṣetre 'sya heṣṭā paricāri virāḥ (263)
(この勇士たちは、この国土の下の佛の摂護の虚空に住んでいる。)

と説示しているから、妙法華經が娑婆世界の下方の空中にいると訳し、正法華
經が下方の摂護の国土と訳しておるが、梵文法華經の説示は、正法華經の訳語
に近く、地下の ākāśa という虚空は佛に摂護される場所であることを示して
いる。これによって見ても地下の虚空世界という ākāśa の世界は佛によって

摂護されるべき世界であると受け止めるべきではなかろうか。

そして、この品の最後に位置する偈の中では、

常好在禪定 為求佛道故 於下空中住。(42上)

静行無為 如虚空界 悉無所著 禪定精進 為安住子。(113上)

として、佛道を求めるための故に娑婆世界の下の虚空・ākāśa 世界にとどまっていたことを示し、梵文法華經も

asaṅga - cāri pavane 'va santi ākāśa - dhātau satataṃ anisritāḥ |
janenti viryaṃ sugatasya putrāḥ paryeṣamānā ima buddha -
bhūmim || (266・7) (障りがないように、常に虚空世界で無執着で、善男子等は
精進し佛の位を希求する。)

と示して、佛道のための故に虚空・ākāśa の世界にいることを説示している。

ここで考えなければならないことは、摂護とは・娑婆世界の下の虚空とは何を意味するのかということであろう。

ここで思い出されるのは、法華經の中でしばしば示されている言葉である。

例えば化城喻品においては、十六王子の請いを入れて大通智勝如来が、

名妙法蓮華教菩薩法佛所護念。(25上)

と説いたという言葉である。この言葉にたいする梵文法華經は

Saddharmapuṇḍarikāṃ nāma dharma - paryāyaṃ sūtra antaṃ mahā -
vaipulyaṃ bodhisattva avavādaṃ sarva - buddha - parigrahaṃ vistareṇa
saṃprakāśayāmāsa」(161) (妙法蓮華と名付けられる法門・沢山な菩薩を誡め、
一切の佛に護念せられる教を廣く説くであろう。)

と示されており、法華經は菩薩を誡める avavāda ための教えであり、すべての佛によって摂護されるものである、ことを意味している。この佛に摂護されるというありようが、正法華經では摂護土界・摂護百千佛土となったと思われるのであるが、正法華經は

說正法華方等經典菩薩所行一切佛護。(91下)

と訳しており、佛に護念せられるという意向が示されている。しかし、方等經というのは何を示すのだろうか、今は不解である。尚、序品において日月灯明如来が大乘を説いたとする説示において、正法華經は

勸発菩薩護諸佛法。而為衆会講演大頌方等正經。(66上)

と示しているから、諸佛に護られる教えであることは廣く知られていることであろうが、ここでも方等正經の語句がある。尚、この言葉にたいする妙法華經と梵文法華經とは、それぞれ

名_二妙法蓮華教菩薩法佛所護念_一。(4上)

Saddharmapuṇḍarikam nāma dharma - paryāyam samprakāśayāmāsa

(18) (妙法蓮華と名付ける法門を説かれた。)

と説示されている。妙法華經は化城喩品の訳と同じであるが、梵文法華經にはただ、説かれたとあるだけで、佛所護念に該当する説示はない、漢訳の二經は意識をしたものか、意識をするほどにこの語句は廣く知られたものなのかもしれない。そして、序品の長行の末尾にも、「名_二妙法蓮華教菩薩法佛所護念_一。」(4中)「*taṃ Saddharmapuṇḍarikam dharma - paryāyam sūtrāntam mahā-vaipulyam bodhisattva avavādam sarva - buddha - parigraham bhāṣitu - kāmam*」(20) (この妙法華經の法門を、沢山な菩薩を誡め、一切の佛に護念せられるを説こうと思っておられる。)と、妙・梵の両法華經は示しているが、正法華經には「大聖當為我等講正法華方等典籍。於是薄首菩薩。」(66中)とあって、正法華と方等の典籍とあり薄首の菩薩のために説かれると訳しており、佛所護念ほどに明白ではない。⁽⁴⁾

そして、譬喩品にも、舍利弗に前世での本願を思い起こされるために、

名_二妙法蓮華教菩薩法佛所護念_一。(11中)

則當受斯正法華經一切佛護。(74上)

imam Saddharmapuṇḍarikam dharma - paryāyam sūtrāntam mahā - vaipulyam bodhisattva avavādam sarva - bhddha - parigraham

羅什訳妙法華經の二三の問題（望月海淑）

śrāvakāṇaṃ samprakāśayāmi (64)（この妙法華經の法門の經典を、沢山な菩薩を誡め、一切の佛に護念せられるを説こう。）

と示されており、前文と同様な説示である。ただ、ここでは正法華經も一切佛に護られると訳している。

これ以上は煩雑にわたるので言及を留めておくが、法華經が佛によって護念されるものであるとの理解は、正法華經においても認めることができるであろう。

如上の指摘において、從地涌出品において正法華經が ākāśa をもって拱護土界と訳し、各各拱護百千佛土と訳出したのには、法華經が佛によって護念されるものであるという意識のもとになされたのではないかと思われるのである。もしこの仮説が認められるとすると、妙法華經が娑婆世界の下の虚空世界、無量百千万億の国土の虚空と訳したのには、他の箇所においても殆どの場面で antarikṣa・空中を虚空と訳しているのであるから、いささかな問題があるといわなければならない。言い換えると、妙法華經は antarikṣa や vaiśāṇavīya や ākāśa をほとんどの場合、虚空と訳出しており、ākāśa という語が持っている特異性、特に從地涌出品の持っている地涌菩薩の特殊な性格に思い及ばなかったのではないかと思われるのである。

何れにしろ、從地涌出品での ākāśa にたいする訳語は、正法華經の方が良いように思われる。何故に鳩摩羅什は antarikṣa と ākāśa の二語を共に虚空と訳してしまったのか不思議に思われる。特に從地涌出品から始まる久遠実成の説示の展開には、重要な意味が込められているので、この語が antarikṣa と同じ訳語では困るのではなかろうか。ここでの地下の虚空というのは時間・空間を超えるところの説示でなければならない。時間・空間を超えた説示であるので、釈尊の生命はインド出現という現実から離れなければならない。黒髪の青年が白髪の老人を指して、これは我が子だといい、老人が青年のことをこれは我が父であり我等を養育したのだ、という説示こそが、現実を超える説示

の一ステップであるはずであり、それが如来壽量品の久遠実成の説示に繋がっているからである。そのためには、地下の虚空というその場所が、佛によって摂護される世界のものでなければならない。この点は、鳩摩羅什の妙法華經の訳語には、我々が再考しなければならない点があるというべきであろう。⁽⁵⁾

4 塔 stūpa から caitya への変遷

このことに関しては、すでに述べたところでもあるが、⁽⁶⁾今、改めて要点だけを示すことにする。

如来神力品において有名な「是中皆応起塔供養。(52上)」という一句があるが、この言葉が塔を建てることの理由として使用されているところである。正法華經には「当起塔廟。(124中)」と示され、梵文法華經には「taṣmin pṛthivī - pradeśe tathāgatam uddīśya caityaṃ kartavyam (331) (この大地の場所に如来のために caitya が建立されるべきである。)」と示されている。すなわち、妙法華經が塔と訳したものを正法華經は塔廟と訳し、梵文法華經では caitya と示していることになる。

caitya という言葉は「塔・塔廟・靈廟・寺」などと漢訳されているが、更に「制多・支提」などと音訳もされている。一方、stūpa は「塔・塔廟」などと訳されるが、その音訳は素塔婆であるように、これは遺骨を納めるために建てられるべきものであるから、ここから五重塔などが建立されるようになってきたことは、佛教の歴史が示すところでもある。また Edgerton 『Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary』の中には、caitya は神聖な場所・寺などを意味し、精神的なものを示すものとして使用される、ことが示されている。⁽⁷⁾

そこでインドの佛教遺跡を調べてみると、アジャンターやカーンヘリー等において、この caitya 窟に出会うことができる。それは岩をくり抜いて造ったもので、壁のある入り口から入ると、広い空間の両側に列柱が掘り残されてお

り、柱を立てて造られた木造建築をイメージしたものと思われるが、その列柱の並んでいる広場の一番奥の場所において、塔 stūpa が建てられている。すなわち、その塔の前は広々とした空間になっており、そこで人々は礼拝・供養をするようになっている。

言い換えれば、塔・stūpa は礼拝の対称であるわけで、その空間でみんなが釈尊の舍利・stūpa に祈りを捧げるように造られているのが caitya であることになる。caitya 窟はこのようなものであるから、ただ単に塔と訳してすませるわけにはいかないであろう。礼拝・供養をする場所であるからには、現今の佛教の立場から見ると、本尊にたいする祈りを捧げる場所、すなわち、それは本堂でなければならないと思われる。⁽⁸⁾

一方、caitya の語が法華經において使用されるのは4回であり、あとはほぼ stūpa であるが、この詳細については「塔に関しての疑義」（身延論叢第13号）の中において、一々紹介してあるのでそれを御覧ねがいたい。

では caitya が示されている四箇所について、それがどのように使用されているのかを見ていくことにする。最初は法師品である。それは法華經にたいしての受持・誦・誦・解説・書写をすべきであることを説いた後に、その場所が何処であっても（在在処処）、法華經を説き誦し誦し書写し經卷所住の処があるならば、として次のように示されている。

皆応_レ起_二七宝塔_一極令_レ高廣嚴飾_レ。不_レ須_二復安_二舍利_一。所以者何。此中已有_二如来全身_一。（31中）

以大宝立高廣長大。不当復著佛舍利也。所以者何。則為全著如来舍利。其有說此經法之処。（101中）

と、妙・正両法華經が訳する内容はほぼ同様である。梵文法華經は、

tasmin Bhaiṣajyarāja pṛthivī - pradēṣe tathāgata - caityaṃ
kārayitavyaṃ mahantaṃ ratna - mayam uccaṃ pragṛhitaṃ na ca
tasminn avaśyaṃ tathāgata - śarirāṇi pratiṣṭhāpayitavyāni | tat

kasya hetoḥ | eka - ghanam eva tasmīṃs tathāgata - śarīram
upaniḥṣiptaṃ bhavati … (201) (葉王よ、この大地の場所では、大きく高い七
宝造りの如来の caitya が建立されるべきである。そこには如来の舍利を安置する
必要はない。それは何故か、ここには如来の全身の舍利が移されているからである。)

であり、妙法華經が訳した七宝塔という言葉、正法華經が訳した大宝立云々の
言葉は、caitya にたいするものであることが分かる。上述のごとく caitya は
舍利塔ではなくて礼拝供養をする場所であるから、佛の舍利を安置する必要が
ないことを指摘し、その理由としてそこには、如来の全身・eka - ghanam が
祀られているからであるとしている、ここが重要なところであろう。法華經を
読み読誦し解説し書写するところというのには、法華經の經卷の中にこそ、如
來のすべてがあることを意味しなければならないからであろう。

二箇所目は、法師品の先述の場面に引き続いて、華・香・瓔珞等を供養し讚
歎すべしとした次に、

若有_レ人得_レ見_レ此塔_レ礼拝供養。(31下)

若有_レ衆生欲得_レ佛寺_レ稽首作礼者。(101中)

ye ca khalu punar Bhaiṣajyarāja sattvās taṃ tathāgata - caityaṃ
labheran vandanāya pūjanāya darśanāya vā sarve (201) (実に葉王よ、
如来の caitya に参詣し、尊敬し、供養し、見るすべての衆生等は。)

と示されており、これらをなす人びとは無上等正覚に近づくと、妙・
正・梵の三法華經はともに示している。しかし、妙法華經は塔と訳し、正法華
經は佛寺と訳出して微妙な違いがある。それは梵文法華經が tathāgata -
caitya と表現していることに原因があるに違いない。如来の caitya は前述の
ように塔ではありえないで、礼拝・供養をする場所のことであるから、佛寺と
いう訳語になったと思われるからである。

法師品から展開される法華經の説示は、それ以前の佛弟子が対象ではなく菩
薩に変わっている。それに、佛滅度の後という言葉も、この品から現れるので

あり、經典の受持・読・誦・解説・書写が示されるように変化してきている。これは何を意味するのだろうか。

布施浩岳博士によると、序品から授学無学人記品までと随喜功德品は第一類成立で、法師品から提婆達多品を除いて如来神力品までが第二類成立で、その他は第三類成立の法華經だとある。そして、「第一類の諸品が受持、誦誦、解説を説けるのみなるに反し、本品（法師品）には受持誦誦解説書写供養を説き、其中、誦誦（√vac）は第一類では使われぬ法行であって、書写も供養も本品に到って始めて現れた修行法である⁽⁹⁾」と示している。すなわち、法師品では、説法の対称が佛弟子から菩薩に変わったというだけではなくて、今まで説かれてきたのは受持・誦誦、解説であったが、新たに書写・供養が加えられたということになる。書写行が説かれるのには、すでに書写をするべきものがなければならぬので、今までの諸品とは性質を異にしているであろう。布施博士はそこで、第一類の法華經を書写するという形で、第二類成立がなったとなしているのであるが、佛教史的に見るならば、釈尊そのものにたいする信仰から佛舍利への信仰、更には教えを文字として残し、それが經典となってきたのであるから、經典そのものの中に釈尊を見ようという信仰へと変わってきたことを意味するであろう。

佛伝によれば、釈尊が亡くなられた時に、マッラの人びとを中心にし、主だった部族の7人との間に釈尊の舍利を巡って対立がおこり、結果、ドロウーナの意見によって、舍利は8分され、それに舍利を納めていた壺はドロウーナに、茶毘に付された時に生じた灰を加えて、10の舍利塔が建てられ、後アソカ王がこの塔を発掘してインド全域にわたって8万4千の塔が建てられたという⁽¹⁰⁾。このことは、釈尊滅度の後の佛教の歴史を見ると、最初は舍利にたいする信仰があったわけであるが、時代が下がり、部派佛教から大乘佛教が興起するにおよんで、有限な形あるものとしての舍利信仰から、書写することにより無限な広がりを見せる經典への信仰へとの変貌が見られるであろう。

かくて、三番目の caitya についての説示は、分別功德品に見ることができ
る。如来壽量の説示を聞き四信が説かれ、如来滅後に法華經を受持・読・誦・
解説・書写（供養）が説かれるのが分別功德品であるが、その最後の長行の末
において、善男子善女人あり

若坐若立若行処此中便應起塔。一切天人皆應供養如佛之塔。（45下・46
上）

若有一人。一反聞名勸助代喜。乃獲此福。何況有人。專精聽受供養思惟。
而復具足為人説者。（118中・下）

と示されており、妙・正の法華經の説示にはあまり通ずるものは見られないが、
梵文法華經には、

yatra ca Ajita sa kula - putro vā kula - duhitā vā tiṣṭhed vā niṣided vā
caṅkramed vā tatra Ajita tathāgatam uddīśya caityaṃ kartavyaṃ
tathāgata - stūpo 'yam iti ca sa vaktavyaḥ sadevakena lokena iti (288)
（阿逸多よ、もし善男子・善女人がおり、或いは坐り、或いは歩きまわるところな
らば、阿逸多よ、そこに如来のための caitya を造るべきであり、これは如来の塔
である、と、神々も世間の人びとによって言われるべきである。）

と説示されており、妙法華經が塔と訳したものは caitya であり、その caitya
は如来の塔であると神や人びと（一切天人）によって言われるべきものだ、と
いうことが分かる。したがって如来の塔（佛之塔）とは、stūpa ではなくて
caitya であることは明白であろう。しかして、この次に示されている偈の中
において、

恭敬於塔廟 謙下諸比丘。（46上）

恭敬立思惟 比丘尼常当 謙恪不自大。（117下）

akrodhano apiśunaś caityasmin gaurave sthitaḥ | bhikṣūṇāṃ praṇato
nityaṃ na adhimāni na ca alasaḥ || (290) ((彼は) 怒らず、誹謗せず、caitya
を敬い、比丘たちには常に卑下し、増上慢せず、怠惰でもない。)

と、説示されている。これが四番目の caitya の説示であるが、塔廟とは caitya のことであり、それにたいして恭敬し、誹謗などをせず、卑下し、慢心をいだかず、怠惰でもない、という時、それは caitya に佛の全身を見るといふ思いを求めるものであろう。妙・正両法華經の恭敬・謙下・謙恪の語はそれを示すものであり、正法華經の不自大も慢心を誡めるものであろう。

このような説示にいたる展開は、この前述の引用の場面の前において求めることができる。それは四信五品の中の滅後の説誦品において、法華經を受持・説・誦するものの功德を示す中で、この人は如来を頂戴するものであるから、この人は

不_レ須_レ爲_レ我復起_二塔寺_一及作_二僧坊_一以_二四事_一供_レ養衆僧_上。(45中)

超於興起爲佛塔廟。起於建立精舍講堂。(117上)

na me tena Ajita kula - putreṇa vā kula - duhitṛā vā stūpāḥ kartavyā na vihārāḥ kartavyā (287) (阿逸多よ、この善男子・善女人は我がために塔を建てたり、僧坊を造ったりする必要はない。)

と、説示されている。妙法華經が塔寺と訳し、正法華經が佛塔廟と訳したものは stūpa であり、妙法華經が僧坊と訳し、正法華經が精舍講堂と訳したものは、僧の住まいである精舍・vihāra であることは明白である。何故必要でないのかというのは、この人は法華經を受持・説・誦する人であるからであり、如来を頂戴する人であるからであろう。言い換えると、法華經の中には如来の全身があるからに外ならない。如来を頂戴するというのは、

何況説誦受持之者。斯人則爲頂_二戴如来_一。(45中)

聞此經卷亦不誹謗。欲樂受持。則爲如来所見擁護。(117上)

kaḥ punar - vādo ye dhārayiṣyanti vācayiṣyanti | tatas tathāgataṃ so 'ṃsena pariharati ya imaṃ dharma - paryāyaṃ pustaka - gataṃ kṛtvā 'ṃsena pariharati (287) (まして、受持し読むであろう人は言うまでもない。

この法門を書物にして肩にする人は、如来を肩にするのと同じである。)

という説示によるからである。すなわち、經典（書物にしたもの）そのものにたいしての受持・読・誦する人こそが求められる人だということで、それ故に頂戴如来といわれ、如来に擁護せられるということになるであろう。これは如来・釈尊のすべては法華經の中にこめられておるからして、法華經經典そのものへの信仰が求められていることの証明でもあろう。

よって、この品は上述の説示につづいて、法華經を受持・読・誦・解説・書写する人は、として次のように示めしている。

為已起_レ塔造_レ立僧坊_レ供_レ養衆僧_レ。則為以_レ佛舍利_レ起_レ七宝塔_レ。(45中)

以為具足興立塔廟。起七宝寺上至梵天。悉為供養一切舍利。其佛塔寺周廻無限。(117上)

kula - putreṇa vā kula - duhitrā vā śarireṣu śarira - pūjā sapta - ratna - mayāś ca stūpāḥ kārītā … teṣāṃ ca śarira - stūpānāṃ (287) (善男子・善女人によって舍利について七宝造りの舍利塔が建てられたのであり、…彼等は舍利塔を（建てたのである）。)

との説示がそれである。これは明らかに法華經を受持・読・誦・解説・書写する人は、すでに佛舍利のための舍利塔を建てたことになる、ことを示したものであろう。

5 耆闍崛山と靈鷲山

妙法華經において耆闍崛山と訳されているのは、序品・見宝塔品・分別功德品・妙音菩薩品・普賢菩薩勸発品の五品であるが、これは梵文の Gṛdhrakūṭa にたいしての音訳であることは知られている。ところが如来壽量品においては、同じ言葉が靈鷲山と訳されている。これは何故かと思うところであるが、そこには鳩摩羅什の妙訳が窺われると言うべきであろう。順を追って見ていくことにする。

先ず序品においては、

一時佛住_二王舎城耆闍崛山中_一。（1下）

一時佛遊王舎城靈鷲山。（63上）

ekasmin samaye bhagavān Rājagṛhe viharati sma Gṛdhrakūṭe parvate

（1）（ある時、世尊は王舎城のグリドラクータ山に住み。）

と説示されている。この Gṛdhrakūṭa という山は、現在はラジギールと呼ばれ、実存の山である。Gṛdhrakūṭa というのは、gṛdhra は鷲のことで kūṭa は頂のことであるから、鷲の峰とも呼ばれている。このことにはさしたる問題はない。ただ正法華經が何で靈鷲山と訳したかはわからない。

見宝塔品においては、釈尊の分身の諸佛が多宝塔のところに来集した時に、侍者を使わずが、その時の言葉として、

汝往_二詣耆闍崛山釈迦牟尼佛所_一。（33中）

汝等往詣耆闍崛山能仁佛所（103下）

gacchata yūyaṃ Gṛdhrakūṭaṃ parvataṃ gatvā ca punas tasmimś taṃ bhagavantaṃ Śākyamuniṃ tathāgatam arhantaṃ samyak - saṃbuddhaṃ vanditvā …（213）（汝等はグリドラクータ山に往け、往って尊い等正覚者の世尊釈迦牟尼如来を礼拝せよ。）

と説示している。すなわち、ここでは妙・正両法華經とも耆闍崛山と音訳していることになる。

これにたいして、如来壽量品の偈においては、衆生既に信伏し質直にして心柔軟にして、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまざれば、

一心欲_レ見_レ佛 不_二自惜_二身命_一 時我及衆僧 俱出_二靈鷲山_一。（43中）

として、衆生が渴仰して恋慕するによって、として

神通力如_レ是 於_二阿僧祇劫_一 常在_二靈鷲山 及余諸住処_一。（43下）

と説示している。これにたいする正法華經は、

又觀吾沒 愁悒憂感 若復見佛 歡喜踴躍 假使質直 説至誠言 衆生之類 朽棄身體 然後如来 合集衆音 能自示現。（114下）

不可思議 億百千劫 吾常建立 如此像誼 佛來至於 靈鷲之山。(114下)
と説示しているが、前半の部分においては耆闍崛山とも靈鷲山とも、具体名を示してはならず、後半の部分では靈鷲山としている。梵文法華經では、

ṛjū yadā te mṛdu mārḍavāś ca utsṛṣṭa - kāmāś ca bhavanti sattvāḥ |
tato ahaṃ śrāvaka - saṃgha kṛtvā ātmāna darśemy ahu Gṛdhrakūṭe ||
(275・6) (衆生等が正直で柔軟で従順で愛欲を離れる時に、私は声聞の集団をつれて自分の身体をグリドラクータ山に現すであろう。)

sadā 'dhiṣṭhānaṃ mama etad idrśaṃ acintiyā kalpa - sahasra -
koṭyaḥ | na ca cyavāmi itu Gṛdhrakūṭāt anyāsu sayy'āsana - koṭibhiś
ca || (276) (不可思議な千万億劫の間、私の神力は常にこのようであった。他の万億の臥処があろうとも私はグリドラクータ山から離れなかった。)

と示しているから、Gṛdhrakūṭa の一語で表現しているのであることが分かる。

分別功德品においては、法華經の如来壽量品の釈尊の生命が久遠であることを聞いて、深心信解すればとして、

則為見_F佛常在_E耆闍崛山_E。共_E大菩薩諸声聞衆_E圍繞說法_E。(45中)

以見如来在靈鷲山説是經時。与諸菩薩眷属圍繞声聞之衆。(117上)

yad uta Gṛdhrakūṭa - parvata - gatam mām dharmam nirdeśayantaṃ
drakṣyati bodhisattva - gaṇa - parivṛtaṃ bdsattva - gaṇa - puraskṛtaṃ
śrāvaka - saṃgha - madhya - gatam (286) (グリドラクータ山に行き法を説き、菩薩の集団に囲まれ、菩薩の集団に尊重され、声聞衆の真ん中にいる私を見るであろう。)

と説示されている。ここでは Gṛdhrakūṭa を妙法華經は耆闍崛山と音訳し、正法華經は靈鷲山と意識している。

妙音菩薩品では、釈尊の眉間から放たれた白毫相の光が浄華宿王智如来の世界にまでとどいた。そこにいた妙音菩薩は、私は娑婆世界へ行ってみたいと述べ、如来の許しをえて三昧力によって娑婆世界に出現した。文殊師利菩薩はこ

れを見て、釈尊にその因縁を問うた。釈尊は多宝如来が汝等のために姿を表すだろうといい、多宝如来の許しをまって、妙音菩薩は釈尊の面前に出現した、という説示の中において耆闍崛山の語が示されている。すなわち、それは

於耆闍崛山去法座不遠。…而來詣此娑婆世界耆闍崛山。(55中・下)
到忍世界至靈鷲山。当在如来法座中間。…到忍世界至靈鷲山。(127中・下)
iha Sahāyām loka - dhātau Ḡḍhrakūṭe parvate tasya tathāgata -
dharma āsanasya purastāc … iyaṃ Sahā loka - dhātur yena
Ḡḍhrakūṭaḥ parvata - rājas tena upasaṃkrāmad (354・356) (この娑婆
世界のグリドラクータ山の如来の法座の前に…この娑婆世界の山の王様・グリドラ
クータ山に近づき。)

であり、Ḡḍhrakūṭa を妙法華經は耆闍崛山と音訳し、正法華經は靈鷲山と意訳している。

普賢菩薩勸発品では、普賢菩薩が自在神通力をもって東方から来たり、釈尊を頭面に礼拝したというが、その中で、

到娑婆世界耆闍崛山中。(61上)

至靈鷲山往詣佛所。(132下)

sa yena Ḡḍhrakūṭaḥ parvata - rājo yena ca bhagavāṃs tena
upasaṃkrāmad (384) (彼は山の王様・グリドラクータ山の世尊の所に近づいた。)

と説示されている。ここでも Ḡḍhrakūṭa を妙法華經は耆闍崛山と音訳し、正法華經は靈鷲山と意訳している。

以上の点から明白なことは、Ḡḍhrakūṭa を正法華經は見宝塔品で耆闍崛山と訳しているだけで、他はすべて靈鷲山との訳語であり、一方、妙法華經は如来壽量品の二箇所で靈鷲山と訳し、他はすべて耆闍崛山との訳語である、ということである。正法華經が見宝塔品で何故に耆闍崛山と訳したのかは分からない。ただ、妙法華經の場合の靈鷲山の語は、それが釈尊の久遠実成を説示した

すぐ後であるということに意味があるように思われる。すなわちそれは、如来壽量品の説示は今までの説示とは内容を異にすることであろう。今までは始成正覚の釈尊の生命であったが、如来壽量品では従地涌出品での地下の虚空・ākāśa と地涌菩薩との説示により、現実を離れた真如の世界に説法の舞台を移したということが重要なポイントであろう。一心欲見佛・不自惜身命という時に釈尊がその前に姿を表す、という論理の展開には、説法の舞台が実在の山であってはならない、そこに鳩摩羅什が如来壽量品の説示だけを靈鷲山という意識にした意図がくみ取れるように思われる。かかる点が妙法華經をもって名訳だといわれる根拠になるのではなかろうか。

6 結び

以上の論述で、*antarikṣa*・*vaiḥāyasa*・*ākāśa* の三語の中で、注意して欲しいことは、*ākāśa* の使用例であり、特に地涌菩薩に関しての項目の所である。何故ならば、多宝如来が出現し証明をするくんだりでは *ākāśa* の語は使用されていないからであり、この語は正法華經が撰護土界と訳したように、特別な意味が込められていると思うからである。多宝如来の出現や二佛並座の時は空中での物語で、地涌菩薩の住所・並びに地涌菩薩が出現し、釈尊と多宝如来とがおいでになる場所にいたった時に、始めて今までと同じ場所が *ākāśa* に変化しているからであり、ここに如来壽量・久遠への道が切り開かれる展開が見られるからである。地下の虚空とは法華經の信仰を軸として、この世と未来の世との連関を暗示するものと思われるが、過去と現在と未来との繋がりが、このことなくしては考えられないと思われるからである。したがって、二処三会という従来の法華經の見方は考え直さなければならないものとする。

塔 *stūpa* と *caitya* の問題に関しても、如来神力品を鳩摩羅什が何故に塔と訳したのか、実に不可思議に思われる。經典への信仰が法華經の説示の展開であることを思う時、これは重大な誤訳だったといわざるをえないのである。

如来碍量品で、鳩摩羅什は Gṛdhrakūṭa を靈鷲山と意識している。これは逆に大変な名訳だといふべきものであろうと考えるところである。

注

- (1) 「法華經における虚空について」197～224（『佐々木孝憲博士・古稀記念論文集・佛教学佛教史論集』）。「法華經における虚空の理解」175～195（『渡邊寶陽博士古稀記念論文集』）。「塔についての疑義」1～24（身延論叢第13号）。
- (2) 松波誠康等訳の『法華經1』には、「町の四辻の露地に坐り」（1・94）とあり、岩本裕訳の『法華經上』には、「四つ辻の広場に赴いて」（上巻・167）とある。ākāśa には露地・空き地等の意もあるので、かく訳されたのであろうが、現実の場面を超えた話であるので、あえて虚空と訳しておいた。
- (3) F. Edgerton の『Hybrit Sanskrit Dictionary』には、“often associated with sūnya” (299) とある。尚、ここでの梵文法華經の和訳に関しては、拙著『法華經における信と誓願の研究』（22・75）を一読願いたい。
- (4) 宇井伯寿『佛教辞典』（949）には方等について、①大乘の別名②方正・平等の義。中道実相の理を指す③方は廣、均しく諸教を並べ説く義④方は方法、等は平等の義。有・空・双亦・双非の四門の方法に依り、平等の理に契ふをいう、とある。
- (5) 如上の外に ākāśa を虚空と訳している場面があるが、詳細については拙論『法華經における虚空について』佐々木孝憲博士古稀記念論集『佛教学佛教史論集』所載「法華經における虚空の理解」渡邊寶陽先生古稀記念論文集『法華佛教文化史論叢』所載を一読願いたい。
- (6) 拙論「塔についての疑義」（『身延論叢』第13号・1～24）、塔・stūpa・caitya に関して、法華經の説示を比較検討したもので、法華經としては caitya こそが求められるものであることを論述したもの。
- (7) 『Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary』by Franklin Edgerton・233。
- (8) 中村元編著『ブッダの世界』317・8には、「アジャンターはBC一世紀か紀元前後からの開鑿である。チャイテイヤ窟とは、スツパを安置する礼拝堂のこと、スツパとそれを取りまく繞道がなければならない。さらに前面に礼拝ないし集会のための空間があるのが通例である。」とある。拙論「碑銘幻想・カールリ・カーンヘリ見学報告」（身延山大学機関誌『櫻神』）第46号・118～130参照のこと。
- (9) 布施浩岳『法華經成立史』125・149～151。
- (10) 梶山雄一等訳『ブッダチャリタ』（講談社版・原始佛教10巻）317～329。拙著『釈尊伝（新佛所行讃物語）』221～232参照。